SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

引用の「どこがXのだ」と「何がYだ」の反語性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 案野, 香子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026306

引用の「どこがXのだ」と「何がYだ」の反語性

案　野　香　子

【要　旨】

本研究では、引用の「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文をとりあげ、「どこ」「何」と文末形式の「のだ」「だ」が組み合わさった場合の話し手の発話態度を総合的に検証し、両構文の反語性を明らかにする。

両構文は、話し手が否定的態度で先行語句をX、Yで引用するところは類似する。違いは「どこがXのだ」構文はXを疑念をもって引用していることを相手に確認し、且つXを全否定する真正反語表現である。

一方、「何がYだ」構文は話し手のYに抱く不快感や不審、訝しがりの感情をその場で表出する擬似反語表現であり、「何が東大だ」タイプと「何が、おやだ」タイプに分けられる。

前者はYに備わる社会通念的価値、存在を否定的に捉える。後者はYに不審や違和感を覚えているという態度を強く示そうとする。

【キーワード】「どこがXのだ」「何がYだ」　引用　反語表現

1　はじめに

本研究では、「どこがXのだ」構文、「何がYだ」構文という、先行文脈の一部分をX、Yで引用する類似表現をとりあげ、反語表現としての二つの構文による話し手の発話態度の相違を明らかにする。

次の（1）は「どこがXのだ」構文、（2）は「何がYだ」構文の用例である。（1）では、先行文脈の「ポジティブ」を引用し、「どこがポジティブなんだよ」と述べる。（2）では、先行文脈の「学校」を引用し、「何が学校だ」と述べる。

（1）「あたし、ポジティブになってほしくて」
　　「人殺しをそそのかしといて、どこがポジティブなんだよ～！」
　　（あすか正太『恋する国家権力　総理大臣のえる！』）

（2）「監督になるためには、なにも学校へ行くだけが方法ではない」
　　「ケッ！何が学校だ。現場実践こそが大切なんだ！」
　　（野口友莉『ヌーヴェル・ヴァーグ新世代』）

本研究では、まず、「引用」、「何が」構文、「反語表現」についての先行研究を分析し、それぞれに対する本研究の立場を示す。

次に、「どこが」と「何が」は構文的に異なる文の成分であることを明らかにする。

さらに、「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文の文末形式においてはそれぞれ「のだ」「だ」が一般的に用いられることを示し、「のだ」「だ」が疑問形式文で用いられた時の、話し手の発話態度を考察する。

最後に、「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文の反語性を明らかにする。つまり、両構文は反語表現であるという本研究の立場において、両者は同一の反語的性質を持つのか、あるいは反語表現として異なる性質を持つものなのかを考察する。

本研究の用例は、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」およびテレビドラマの台詞から採集した。必要に応じて作例も用いる。なお、用例、引用文の下線は全て案野による。

2　先行研究と本研究の立場

2．1　引用

加藤（2010：19-20）は引用を（3）、引用するという行為を（4）のように定義し、（5）のように説明する。

（3）引用とは、所与と見なされる言葉を実物提示の形で発話の場に再現することである。

（4）引用するという行為は、発話の場における様々な環境・条件に照らし合わせ、最も適当な表現を引用された言葉として選択する、話者の主体的な営みである。

（5）引用された言葉とは、話者の意図をもって選び出され、時には意味の同一性を保持しつつ形を変えられながら、話者自身により主体的に作られた「表現」である。

（3）での「所与」「再現」について考えてみる。加藤（2010：19）では、「どこかに既に存在している」と見なされることが所与性の第一の要件であると述べられている。しかし、「どこかに」という理解は非常に漠然としたものである。「引用」という表現行為においては先行文脈があることが前提であるが、先行文脈とは何かということを明確にすることが課題であろう。

また、「再現」も（5）で「時には意味の同一性を保持しつつ形を変えられながら」「話者自身により主体的に作られた「表現」」と述べられているが、ここでの「意味は同一であるが話者によって変形された言葉」というのは理解できない。歴史的な意味の変遷による例外を除いて、言葉とは形が変われば意味も変化するものであり、形が変わった以上「意味の同一性」は保たれないと考えられるからである。

本研究では、次の（6）のように「意味の類似性」を優先し、「意味の同一性」「形態の同一性」にはこだわらない。

（6）ある日、山の宿の主に電話がかかってきた。「今、近くできのこ採ったんですけど、マツタケそっくりで。食べても大丈夫でしょうか？」（略）やがて持ってこられたのはドクツルタケだった！「どこがマツタケに似てるんだ？！」あるじはどっと冷や汗をかいた。

（小林路子『なにがなんでも！きのこが好き』）

その上で、本研究では「引用」を次のように考える。

相手の発話だけでなく、話し手の心内に既に現れている概念を先行文脈とする。その先行文脈から「意味の類似性」を優先した概念を話し手の主観で選び出す行為。

上記の定義を踏まえて、「どこがXのだ」構文、「何がYだ」構文において、話し手がどのような心的状態のもとに先行文脈から語句を引用するかを考察する。

2．2 「何が」構文

天野（2008）、高見（2010）、山寺（2010）では、「何を文句を言ってるの」構文も、「何がこの本が面白いの」構文のいずれも話し手のマイナス感情を表す構文であることが明らかになっている。またこの場合の「何を」は高見（2010）では「(「なぜ」などの）付加詞に近い」とし、山寺（2010）は「何が」は「Wh付加詞」とされている。天野（2008）は文そのものを「拡張〈何ヲ〉とがめだて文のヲ句」と呼ぶ。

しかし、山寺（2010）では、場合によっては「何が」は「どこが」と言い換え可能という示唆、「何がこの本が面白いの」構文は引用ではないかという示唆がなされているが、いずれも検討課題として残されており、明確な回答はなされていない。

「どこが」は「NPのどこがXのだ」という連体修飾が可能であるが、「何が」にはそれがない。本研究では、「どこが」と「何が」は本来的に性質の異なるものであるという仮説をたて、両構文において入れ替えはできないものと考える。

2．3　反語表現

反語表現に関する先行研究は非常に少ない。案野（2014：54）は「疑問形式の文でありながら、話し手は聞き手に回答を求めず、肯否逆の主張を行う表現」と定義する。この定義は、山口（1990）、仁田（1991）を踏襲したものであるが、一面的なものであり、実際の反語表現の多様性に対応しているとは言えない。

（7）　あんな嘘つきのどこがいい。(含意：どこもよくない)

（8）　朝から酒を飲んで何が悪い。(含意：何も悪くない)

元の文に対する全否定の含意がある（7）(8）を典型的な反語表現とすると、「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文は同列に論じることができないことに気付く。

（9）　働き方改革だって？これのどこが「改革」なんだ！
　　サービス残業が増えるだけだ！

（10）何が東大だ。東大がなんだ。

（11）「おや？」「何が、おやだ」

（9）は「どこも「改革」ではない」という全否定の含意があり、(7）(8）と同種の反語表現であるといえる。しかし、(10）「何も東大ではない」、(11）「何も、おやではない」という全否定の含意は考えられない。

本研究では、(7）(8）(9）のように、全否定の含意が認められる表現を「真正反語表現」、そうではない（10）(11）を「擬似反語表現」と区別し、その発話態度の相違を追究する。

3 「どこが」と「何が」

3．1 「どこ」と「何」

尾上（2001）によると「どこ」「何」は不定語であり、それぞれ「場所」「物」の内容が不明・不定の「空欄」ということになる。この考え方は、疑問詞疑問文においては説明することができる。

（12）A：北京だったらどこがおもしろい？
　　B：頤和園ですね。

（13）C：あそこのショッピングモールには何が入っていますか？
　　D：カフェとか洋服屋さんとか…。

（12）のAの問いの「どこ」は場所が不明であることを示し、Bも「頤和園」と回答し、不明概念を補充する。同様に、（13）のCは「何」で物の内容が不明であることを示し、不明点を補充することを聞き手に求め、Dは「カフェとか洋服屋さんとか」と応答する。

しかし、（14）（15）は不定語の補充要求を行っているとは言えない。

（14）働き方改革だって？これのどこが「改革」なんだ！サービス残業が増えるだけだ！

（15）「民主主義的に解決しましょう」
　　「何が民主主義だ！ふざけるな！」

（14）の話し手は「どこが」と述べるが、具体的な場所を問う意図はない。含意は次の（16）のようになる。

（16）これのどの部分／どういうところが「改革」なのか。
　　サービス残業が増えるだけじゃないか。

「どこ」は「どの部分／どういうところ」などと解釈され、場所性はわずかにあると思われる。

一方で、（15）の「何」は「物の内容が不明」という「物」の性質は持ち合わせていない。

（15）の「何が」をパラフレーズすると、「何を以て／どういう根拠で／どういう意味で」などになる。

このように、「どこがXのだ」構文と「何がYだ構文」において、「どこ」と「何」は性質を異にすることがわかる。前者はわずかだが「場所性」を持ち合わせている不定語であるが、後者は完全に「物」という意味が形骸化しており、むしろ「何が」という単位全体で一つの文の成分になると考えられる。

3．2 「どこが」と「何が」

3．2．1 「どこが」

「どこがXのだ」構文の「どこが」は「NPのどこがXのだ」という形をとることがあり、その場合は「何が」に言い換えることはできない。

そこで「NPのどこ」という連体修飾句について考えてみる。

西山（2003：33）は、「NP_1のNP_2」をNP_1とNP_2の関係から、次の（17）のようにタイプAからタイプEまで分類する。

（17）タイプA：NP_1と関係Rを有するNP_2
　　タイプB：NP_1デアルNP_2
　　タイプC：時間領域NP_1におけるNP_2の指示対象の断片の固定
　　タイプD：非飽和名詞（句）NP_2とパラメータの値NP_1
　　タイプE：行為名詞（句）NP_2と項NP_1

「NPのどこがXのだ」構文における「NPのどこ」はタイプAまたはタイプDに相当すると考えられる。だが、タイプAは「NP_1と関係Rを有するNP_2」であり、例えば、「俺の本」は「俺が書いた本、俺が所有している本、俺を書いた本」のように文脈で解釈が決ま

る語用論的表現である。しかし、「これのどこが「改革」なんだ」の「これのどこ」は「これ（サービス残業が増える状況）のどこ」という一つの解釈しかできず、語用論的表現とは言えない。

そうすると、「NP_1のどこ」はタイプDに相当すると考えられる。西山（2003：33）は次のように述べる。

（18）NP_2は「NP_1の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延（extension）を決めることができず、意味的に充足しない名詞

つまり、この場合のNP_2は次のように説明される。例えば「この芝居の主役」の「主役」のように、「主役だけ集まれ」という命令は不条理である。「この芝居の」といったパラメータの値が定まらないかぎり意味として完結しない非飽和名詞なのである。

この考え方を「NPのどこがXのだ」に当てはめて考えてみると次のことが言える。「どこ」という不定語の外延を「NP_1（サービス残業の増えた今の状況）」が定め、そのことによって「どこ」は自らの意味が充足される。

厳密にいえば、「どこがXのだ」構文は「NPのどこがXのだ」が本来的な形式であり、「どこ」は「NPの」によって意味的に外延を定められることになる。「どこが」構文においては、「どこ」は常にパラメータである「NPの」を要求しているのである。

以上、「どこ」は場所性が残っている不定語であること、さらに「どこがXのだ」構文は「NPのどこがXのだ」という形態が本来であることを考えると、「NPの有する属性のどこの部分がXのだ」が優先される解釈となる。そして、「どこが」は不定語「どこ」＋格助詞「が」という主語としての文の成分であると考える。

3．2．2 「何が」

「何がYだ」構文の「何」が「NPの」で名詞修飾される例文は管見では見つからなかった。このことから、「何」の不定語としての名詞性は認められず、「何が」も主語という文の成分となることは考えにくい。

（19）単純でつまらない仕事だけれど間違いがあると困るという旨、“ブランドの君”に申し上げると彼女は、「ああ、そうですか。あたし、あなたみたいに能力ないから――」というのだ。「何が能力だ、ばかもん！これから気をつけますくらいいえんのか、いい年こいて！」

（群ようこ『午前零時の玄米パン』）

（19）を見ると、「何が能力だ」に「ばかもん！」が続くことから、話し手が先行文脈の「能力」を怒りで引用し、マイナス感情をストレートに表していることがわかる。「何がYだ」構文は、相手の反応を期待することは重要ではなく、独話としても発せられる。（10）「何が東大だ」、（11）「何が、おやだ」では、不審、不快、訝しがりなどやはりマイナスの感情が表される。「何が」構文でマイナスの感情を表す点は、高見（2010）、山寺（2010）の指摘と同様である。「何がYだ」構文は極めて主観的にマイナスの感情を吐き出す表現であり、論理性はないことから、「何が」は付加詞に近い成分と考えられ、「どこが」とは全く性質の異なる成分であるということができる。

4　疑問のノダ文とダ文

4．1 「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文の文末形式

表1に、BCCWJから採集した「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文の文末形式をまとめた。

表1　どこが構文と何が構文の文末形式

どこが構文		何が構文	
文末形式	用例数（%）	文末形式	用例数（%）
のだ	32（66.7）	だ	70（88.9）
だ	12（25.0）	のだ	8（8.9）
φ	2（4.2）	か／ですか	4（4.4）
ですか／でしょうか	2（4.2）	φ	2（2.2）
		ものか	4（4.4）
ものか	0（0）	あろう／だろう	2（2.2）
合　計	48（100）	合　計	90（100）

「どこがXのだ」構文の文末形式は「のだ」が66.7%で、「だ」の25%の倍以上の用例数である。「何がYだ」構文では、「だ」が88.9%で、「のだ」の8.9%の10倍以上である。標題に示した通り、「どこが」構文は「のだ」が、「何が」構文では「だ」が文末形式となる傾向が顕著である。

まれに「どこがXだ」「何がYのだ」という文末形式になることがあるが、それぞれ次の4．2、4．3に述べる「ノダ文」「ダ文」の説明が当てはまる。

4．2　疑問のノダ文の発話態度

野田（1997）は、例（20）を挙げ、疑問文での「のだ」の働きについて（21）のように述べる。

（20）「これで一斗にはなると思うよ、清太さんも栄養つけな。体丈夫にして兵隊さん行くねんやろ」
「一斗！……一斗になるんですか？」　（野田1997：130）

（21）直前の聞き手の発話の内容（の一部）に驚き、その部分を繰り返して聞き手に確認しようとしている。　（野田1997：131）

（20）は肯否疑問文であり、いわゆる疑問詞疑問文形式の「どこがXのだ」とは異なるが、（21）の説明はほぼ妥当だと言える。つまり、「直前の聞き手の発話の内容」である「一斗」に驚き、繰り返すことによって「一斗になるんですか？」と確認しているのである。先行文脈があるからこそ、当該ノダ文は驚きを前提とした確認の含意を表すことができるのである。ただし、どのような意図で話し手が「確認」しているかは（21）では述べられていない。

（22）A：今晩はカレーよ。
　　B：カレー？また今日もカレーなの？四日連続だよ。もう飽きちゃったよ。
（23）C：お誕生日おめでとう。Dちゃんの好きなキティちゃんのぬいぐるみだよ。
　　D：キティちゃんくれるの？ありがとう！

（22）（23）ともに疑問のノダ文で、先行文脈の内容（の一部）に驚き、その部分を繰り返して「確認」しようとしている。（22）はうんざり、あるいは憤慨などの感情が読み取れる一方、（23）は、喜びや興奮が表される。同じノダ文であっても、「確認」の話し手の動機は文脈によって異なる。共通しているのは、野田（1997）の言う疑問のノダ文の「確認」対象が先行発話の発話内容（コト）である点である。

では、「どこがXのだ」の場合はどうか。

（24）「葉書なんか出すなよ、やらしい真似するなよ」
　　「どこがやらしいんだよ」と乾三が気色ばむ。
（田村章『いつかまた逢える』）

先行発話の「やらしい」という部分を不機嫌な思いで引用し、「葉書を出す行為が有する属性のうち、どこの部分がやらしいのか」と問いかける。この問いかけは空欄を埋めることを求める補充疑問文ではなく、話し手が疑念を有していることを聞き手に確認させるものであり、且つ聞き手に対する強い働きかけでもある。その行為がもたらされることによって聞き手は話し手の疑念の含意を考える。結果、否定的な本音「どこもやらしくない」があることが聞き手の頭の中に浮かび、含意が伝わったということになるのである。「どこがXのだ」構文の働きかけの対象は聞き手もしくは話し手自身である。相手に確認する場合もある一方、話し手の独話で自分に確認する場合もある。

そうすると野田（1997）の疑問のノダ文の確認と、「どこがXのだ」構文の確認とはどのような相違があるのか。

野田（1997）の疑問のノダ文は発話内容（コト）そのものを確認する。しかし、「どこがXのだ」構文は話し手が先行文脈のXに対して疑念の感情を有しているということを聞き手（発話者自身を含む）に確認させる発話態度があると言える。

4．3　疑問のダ文の発話態度

森川（2009：140）は、疑問文に現れるダとして次の（25）を挙げ、「Wh疑問文では「カ」がなくてもかまわない」と説明する。

（25）誰が犯人ダ？

しかし、森川（2009）では疑問文におけるダの機能については解決していない。しかも（25）が疑問文と解釈されるのは、Wh疑問詞があるからであり、ダによるものではない。

森川（2009：9）では、主文のダ一般について、「話し手の主観を表現」し、「はっきりと明言するという意味の「断言」（assertion）の「ダ」とする」と述べる。

（26）「あたし、あなたみたいに能力ないから」
　　「何が能力だ、ばかもん！」

話し手は先行発話を引用して、怒りで「何が能力だ、ばかもん！」と述べる。（26）の下線の発話の方向は相手に向かっているが、このコンテクストでは実際は話し手の心内発

話であると思われる。聞き手の回答や反応は期待していないのである。「何がYだ」構文は、相手の反応を期待しない話し手の一方的な断言であると考える。断言するのは、Yで語句を引用する動機となったマイナスの感情である。マイナスの感情を断言するというのは、つまり、話し手がマイナス感情を聞き手の有無にかかわらず一方的に表出するということである。聞き手が反応するか否かは話し手にとって問題ではない。そのため、引用する先行発話は直前のものでなくてもかまわない。腹に抱えた怒りや苛立ちなどの感情を何かのきっかけで吐き出すことができる。

（27）（授業にて）

高校教師「おれは教師だ！おまえらのことはわかってんだ！」

（場面転換　授業終了後、級友と廊下を歩きながら）

生徒1「くそー、何が教師だ！ムカつくなー」

生徒2「なんか食わねえ？」

（ドラマ　森田まさのり『ROOKIES』）

（27）の場合、授業中の教師の発話が生徒1の発話の直前であるとは限らない。教師はそれ以降にも何らかの発話をしているはずである。したがって、生徒1は、自分が「教師」であることを強調する先行発話から覚えた腹立ちを抱えつつ、授業終了後、廊下を歩きながら、独話として自らの感情を吐露しているのである。

ダ文としての「何がYだ」構文は、話し手のマイナスの感情の断言、直接表出という発話態度があると言える。

5 「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文の反語性

「どこがXのだ」構文も「何がYだ」構文も、話し手が否定的態度でX、Yを引用するところは類似している。さらに本研究の立場では、両構文とも反語表現であると考える。しかし、2．3節で述べたように、「真正反語表現」と「擬似反語表現」としての相違がある。

「真正反語表現」とは「どこがXのだ」構文において、話し手がXを全否定する態度を言う。

「擬似反語表現」は「何がYだ」構文の次のような例である。

（28）東洋大学なのに東京大学から馬鹿にされました。どうしてですか？人間学歴じゃないですよね！人間偏差値じゃないですよね！何が東大だ、東大がなんだ。俺は東洋だよ。東洋エリートなんだよ。

（Yahoo！知恵袋）

下線部「何が東大だ」は含意は「何も東大ではない」という「東大（Y）」そのものの全否定ではない。しかし、「（日本でトップと言われる）『東京』大学といっても『東洋』大学に比べればそれほどの価値はないのではないか」という「東大」の属性や価値を否定する含意はある。引用されたYそのものの全否定ではない、という点で「真正反語表現」の「どこがXのだ」とは異なる。

「否定的」「疑念的」という意味で、益岡（2007：174）では「擬似反語」、高見（2010）では「反語的」という術語が用いられているが、いずれも明確な定義はなされていない。本研究では「擬似反語表現」とし、「対象に疑念を抱き、そのものの価値、属性を否定する」

と定義する。ここでいう「価値、属性」に対する否定的感情とは、話し手個人の状況、文脈、社会的通念といった語用論的要因によるものである。つまり、(28) の「東大」が「日本でトップである」と考えるのは、東京大学のレベルを知っている者であり、また、そう主観的に捉えている者である。辞書的定義による理解ではない。

次の「何がYだ」も擬似反語表現である。

(29) 旦「で、お金はどうした」
若「受け取って参りました」
旦「こっちへ、出しな」
若「おや？」
旦「何が、おやだ」
若「ふところへ入れて来たんだが、おやおや、これは大変だ」
旦「何が、大変だ」
若「今、あそこで、お金を受け取って、ふところへ入れて…」
旦「ははあ、わかった」

(小島貞二『禁演落語』)

「何が、おやだ」「何が、大変だ」が、「何が東大だ」タイプの疑似反語表現「何がYだ」構文と異なるのは、「何が東大だ」タイプのようにYの価値、属性を否定するものではなく、話し手がYに怪訝な感情や不審を抱き、違和感を覚えるといった意味での否定的感情を持つという点である。この場合、引用されるYは先行発話の中で話し手が気に障った声音、文相当の句である。

「何がYだ」構文の、「何が東大だ」タイプと「何が、おやだ」タイプは、話し手がYに対して否定的捉え方をするのは共通している。前者がYで引用された語句の価値・属性を語用論的観点から否定する一方、後者はYで引用された声音・文相当の句に対して不審な感情を抱く、という点が異なる。

ところで、「どこがXだ」というダ文であっても、擬似反語表現となる場合がある。

(30) 小宮「あっ。そうだ、これ聞こうと思っていたんですけど、なんで「ナンシー」なんですか？」
ナンシー関「ほら、ビジュアル系の人ってこういう名前多いですよね。「どこがナンシーだ！」って言われるのも、ひとついいかなと思って。」

(小宮悦子・ナンシー関『無差別級　ナンシー関対論集』)

「ナンシー」というのは一般的には外国人の名前と思われており、「いかにも日本人の顔をした人間のどこに外国人の性質があるのか」という疑念になる。つまり「どこがナンシーだ」は「ナンシー」が担う、外国人としての属性を否定しているのである。これも「何が東大だ」タイプの疑似反語表現であると言える。

6　まとめ

以上、引用の「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文をとりあげ、「どこ」「何」と文末形式の「のだ」「だ」が組み合わさった場合の、話し手の発話態度を総合的に検証し、両構文の反語性を明らかにした。

「どこがXのだ」構文と「何がYだ」構文の「どこが」と「何が」は本質的に性質の異なる成分であり、「どこが」は不定語＋格助詞「が」の主格成分とした。「何が」は付加詞に近い成分とした。

両構文は、話し手が否定的態度でX、Yを引用するところは類似している。違いは「どこがXのだ」構文はXを疑念を引用していることを対象に確認し、且つXを全否定する真正反語表現である。

一方、「何がYだ」構文は話し手のYに抱く不快感や不審、訝しがりの感情をその場で表出する擬似反語表現であり、「何が東大だ」タイプと「何が、おやだ」タイプに分けられる。前者はYに備わる社会通念的価値、存在を否定的に捉える。後者はYに不審や違和感を覚えているという態度を強く示そうとするものと考えられる。

【参考文献】

天野みどり（2008）「拡張他動詞文―「何を文句を言ってるの」―」『日本語文法』8-1，pp3-19
案野香子（2014）「現代日本語反語の専用形式」『言語文化学研究』第9号pp.53-69，大阪府立大学
尾上圭介（2001）「不定語の語性と用法」『文法と意味Ⅰ』所収pp.130-158，くろしお出版
加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現―引用標識に注目して―』くろしお出版
高見健一（2010）「「何を文句を言っているの」構文の適格性条件」『日本語文法』10-1，pp.3-19
西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
森川正博（2009）『疑問文と「ダ」』ひつじ書房
山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院
山寺由紀（2010）「wh付加詞疑問文―「何がこの本が面白いの」―」『日本語文法』10-2，pp.160-176

本研究は、2018年12月15日（土）・16日（日）「日本語文法学会第19回大会」（立命館大学）において口頭発表した内容を一部修正したものである。コメントをいただいた先生方には厚く御礼申し上げる。

An Analysis of Quoted "*Doko ga X noda*" and "*Nani ga Y da*"

ANNO, Kyoko

This study analyzes the structures of similar sentences, "*doko ga X noda*" and "*nani ga Y da*" and their expressive functions when partially quoting from a previous context. It looks at the type of words used for X and Y, the various sentence endings used, and the differences between "doko ga" and "nani ga". The result lead to the following conclusions: The "X" in "*doko ga X noda*" represents an attribute, creating a negating expression that means "this attribute does not exist here." There are two types of "*nani ga Y da*" expressions. One is as a quasi-rhetorical question, and one is an interjection with a weakly negative implication. A common feature of these two types of expression is that the speaker uses a word for "Y" that subjectively feels unpleasant or of little value, even when society generally accepts a positive connotation for the word.